ぞうさんダンスで、さよならモスクワ

田中りえ

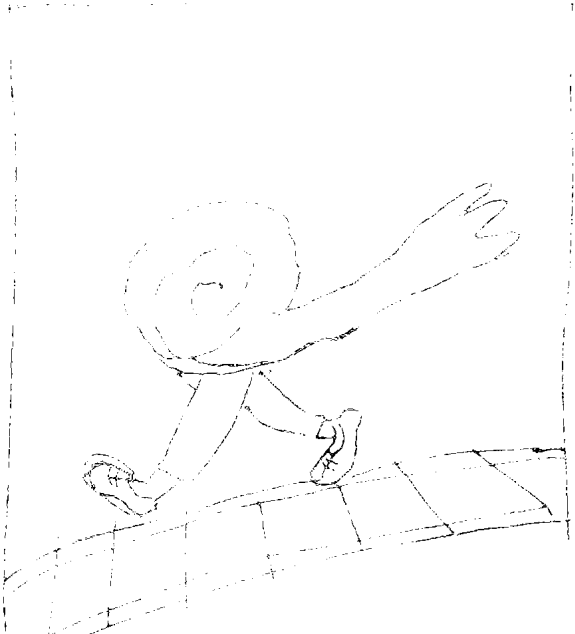
シベリア鉄道で行ってきたよ

田中りえ

ぞうさんダンスで、さよならモスクワ

シベリア鉄道で行ってきたよ

講談社



ぞうさんダンスで、さよならモスクワ
シベリア鉄道で行ってきたよ

昭和五十八年十一月二十二日　第一刷発行

著者——田中りえ
© Rie Tanaka 1983, Printed in Japan
発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号一一二　電話東京〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社堅省堂
定価——八八〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200768-1(0)(文1)

目次

週刊誌を読み終え、ナホトカ上陸　7
ハバロフスクの夜に、はじめてのダンスを　21
食っちゃ寝食っちゃ寝のシベリア鉄道　39
バイカル湖の水は冷たかった　55
またも食っちゃ寝のシベリア鉄道　69
ぞうさんダンスで、さよならモスクワ　91
行ったり来たりのバルト海　125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

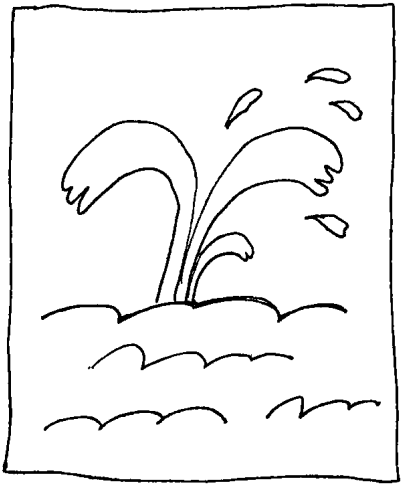
ゲッティンゲンで、勉強ヌキの学生生活 139
絵ハガキとはちょっと違ったアテネの街 167
スペインとポルトガルの国境は船で越え 191
なにしに行ったの、ニューヨーク 213
最後はバンコク、歩くのがいちばん 227
あとがき 244

装幀・カット　北村紀子

ぞうさんダンスで、さよならモスクワ

シベリア鉄道で行ってきたよ

週刊誌を読み終え、ナホトカ上陸



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

船室に荷物を置いてデッキにあがると、出航二十分前だというのに、もう、赤白黄緑青ピンク紫と、五色以上のテープが船と岸のあいだに行き交っていた。ドラムとギター、キーボードの三人編成のバンドが青空の下でアップテンポなロシア民謡を演奏している。いったん船に乗りこんだ白人の男のひとが手ぶらでタラップを降りてきて、女のひとと抱きあっている。乗船口で荷物検査をしているひとは、見て見ぬふりをしていた。飛行機ではもちろん、いったん機内にはいって、また出てきてチュウというわけにはいかない。どうせひまなんだから、船で旅立つことにしてよかった。横浜港から電車で三十分のところに住んでいるのにひとりの見送り人もいないわたしも、外国航路の船出を楽しめる。

テープはさらにつぎつぎと投げられ、半分くらいは違う方向にとんだり、途中で落っこちたりしているが、十も二十も握りしめているひとがいる。きっちりとスーツを着た日本人の男のひとだ。岸には、やはり背広姿の男のひとたちと、事務服のままかけつけた女子社員が五、六人ずつ並んでいる。会社がすぐ近くなのだろうか。そのはしには、まだ生まれて半年ぐらいの赤

ちゃんを抱いた女のひとが、子供の手にテープを握らせている。きっと単身赴任なんだろう。
乗客は、日本人より白人のほうが多い。「バイカル号」という名の、ナホトカにむかうソ連の船なので、ロシア人の乗客もいる。
あっちでも別れが、こっちでも別れがと、船にいるひとは全員旅立つのだから、岸のひとと別れるのはあたりまえなのだが、その別れのなかをうろつきまわって、センチメンタルな気分に、ひとりかってにひたりきっていた。
テープをたくさん握っている背広を着たひとのところにもどってみると、もとのままだった。十一時の出航時間になっても、船は動きださない。もう二十分も岸と船でむかいあったままだ。話をするには離れすぎている。じっと見つめあっているのは恥ずかしいのか、目をそらしてみたり。五人並んだ事務服姿の真中の女の子が思いつめたような表情で下をむいている。さてはオフィスラブでもあったのかしら、涙でも流しちゃうかしらと注目していると、彼女、こらえきれずにそっとあくびをした。
定刻十分すぎになって、船はソロリソロリと動きだす。ピンと張った色とりどりのテープがスルリと手から離れていく。出るまではしぶとかったが、動きだしてしまえば、見る見るうちに桟橋が小さくなっていった。
船室にもどると、日本人とアメリカ人の女の子がいた。四人部屋だが、三人しかいないらしい。二人ともひとり旅で、わたしと同じツアーでモスクワまで行くそうだ。わたしが申し込ん

だツアーは、モスクワまで、船と汽車で行く片道ツアーで、ナホトカからロシア人のガイドさんがつく。日本人の女の子は良子(りょうこ)ちゃんといい、モスクワからレニングラードに行き、そこから飛行機で日本に帰る。大学を出てから二年間小学校の先生をしていたが、今年の三月でやめたそうだ。アメリカ人はキャサリン。アメリカの大学をでて、日本に遊びにきた二十一歳の女の子。モスクワからロンドンまで汽車とフェリーで行き、そこから飛行機でシカゴにかえるそうだ。同じツアーにひとり旅の女の人が、もう二人もいて安心した。わたしはモスクワからフィンランドのヘルシンキに汽車で出て、ヨーロッパ内の鉄道を乗り放題のユーレイルパスで二ヵ月間旅行し、お金があまったらアメリカにも行く予定。帰りの切符は持ってない。

十一時に船はでたが、船のなかでは時計を一時間すすませるので、一時の昼食時間がすぐにきた。食堂の席順はあらかじめ決まっている。わたしのいたテーブルは、ナホトカに出張のサラリーマン二人、ロンドンに仕事で行っている夫のもとへ引越していく奥さんと六歳と四歳ぐらいの子供二人。ロンドンまで付き添う、奥さんのお母さん。モスクワに知合いがいるので、思いきってシベリア鉄道で行くことにしたそうだ。子供は二人とも元気いっぱいだ。それと、さっきテープをたくさん握っていたナホトカに単身赴任の男のひと、そして良子ちゃん。この席はあさってナホトカに着くまで同じだ。日本人は日本人と組みあわせてある。バイカル号はソ連の船だから、食事のとき正装しなくてはいけないといった堅苦しさは、まったくない。部屋以外はデッキも食堂も一等二等の区別もない。

船での最初の食事は、いくらのオードブル、ボルシチスープ、目玉焼をのせたハンバーグポテト添だった。とくべつおいしくはないが、ぜんぶきれいに食べられた。すわってさえいれば料理がタダで運ばれてくるのは、気楽でいいもんだ。

となりにすわっている、出張でナホトカに行くおじさんに、どこに行くのときかれたので、モスクワまで汽車で行きますといったら、びっくりしている。

「へえ、モスクワまでねえ、ずいぶん時間がかかるんでしょ」

「乗りっぱなしだったら、ナホトカからモスクワまで、八泊九日なんです。でもわたしたちのツアーは、途中、ハバロフスクとイルクーツクに一泊ずつするんです」

「それでモスクワから先はどうするの」

「ヘルシンキにでて、ユーレイルパスでヨーロッパを二ヵ月まわるんです」

「ふーん、二ヵ月ねえ、すごいねえ、ぼくだったら、一週間休みをくれるっていわれたら、あれもしようこれもしようって考えられるけど、一ヵ月休めっていわれたらどうしていいかわからない。えらいねえ」

べつにえらくはない。わたしはカネとヒマがあるから、ごく気軽に出てきただけなんだから。カネは、大学時代に書いた小説が本になり、質素に暮せば、一年ぐらいはなんとかなるぐらいもらった。ヒマは、大学を出て一年間勤めた会社をやめたので、いくらでもあった。東京でダラダラしていても減るだけだから、有金ぜんぶ持って外国に行くことにした。行き先はどこでもよかったが、大滝詠一の「さらばシベリア鉄道」という歌をきいて、シベリア鉄道に乗

りたくなったので、それに乗ってヨーロッパに行くことにした。ヨーロッパには大学を卒業した春にいちど行ったことがあるから、ひとり旅に、不安はなかった。

昼食のあとは部屋にもどって昼寝。今日いくらでも船で眠れるだろうと思い、きのうの晩三時間ぐらいしか寝てないのだ。なにしろ、今日出発するということを決めたのは三週間前だし、荷物をつめたのも昨夜、夕食がすんでからだった。ソ連のガイドブックの一冊も読んでない。モスクワまではツアーだから、ボケッとしていれば着くだろう。ヨーロッパはガイドブックを一冊持ってきたから、それを見ながら旅すればよい。

昼寝から起きたら、また食事、スープをぬかして、昼食と同じようなメニューだった。食事が終わると、なにもすることがない。良子ちゃんと二人でダンスホールにお酒を飲みに行く。正面のステージでバンドがアメリカのポピュラーミュージックを演奏している。中央がダンスのスペースにぽっかりあいていて、左右の壁ぎわにゴチャゴチャといすが置いてある。左のほうでは、チェコスロバキアのおじさんやおばさんが陽気に騒いでいる。右のほうでは日本人がぽつりぽつりと飲んでいる。わたしたちはカウンターで水割を買い、右側にすわる。

登山靴をはいた色の黒い、大学の探険部の学生がいた。ソ連南部とモンゴルをまわるそうだ。どの靴をはいてこようか迷ったが、安くて丈夫な登山靴に決めた。だから彼は、食堂でも廊下でも、どこでも登山靴で歩いている。

あごひげを生やした、マスコミ関係者だという、三十代後半ぐらいのお兄さんもいた。ソ連

のあちこち行って写真をとり、文も書くそうだ。お酒が好きでマスコミ関係だというので、いきなり、

「新宿ゴールデン街あたりで飲んでますか」

ときいたら、

「ヌシです」

とこたえ、ウイスキーのロックをぐいと飲んだ。わたしもたまに新宿で飲む。マスコミ関係のひとが多いところだが、ソ連行の船の上で同じような店で飲んでいるひとと会うとは思わなかった。

彼はバイカル号でソ連に行くのは二度めだそうだ。十月末に出たこの船は今年の最終便で、七十名ほどしか乗ってないが、前に乗ったときは夏だったので二百名以上の乗客がいた。このホールもひとでいっぱいで、バンドものって演奏し、夜中までにぎやかに踊っていたそうだ。今はチェコスロバキアのおじさんとおばさん、二人しか踊っていない。でも、おじさん、踊りがじょうずで楽しそうだ。

同じツアーでモスクワまで行く日本人の男の子二人にも会った。ミチオとシローだ。ミチオは名古屋の魚屋のひとり息子で、二十二歳。高校を卒業して、東京に修業に来ていたが、家に帰ることになったので、その前に東京でためたお金で半年ぐらい、ヨーロッパとアメリカをまわる予定だ。シローは二十五歳、七年間勤めた自動車会社をやめて出てきた。十年前から、この旅行を計画していた。ヨーロッパからギリシャ、トルコ、インド、ネパールと一年間ぐらい旅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com